

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520438

研究課題名(和文)近代雑誌メディア文化におけるジェンダーと異文化表象の編成に関する日露比較研究

研究課題名(英文)The comparative study on the construction of gender and cultural representation in the modern printed media

研究代表者

溝淵 園子 (MIZOBUCHI, Sonoko)

広島大学・文学研究科・准教授

研究者番号：40332861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀初頭のメディア文化として、日本の少女雑誌を取り上げ、そこに見られるロシア表象の特徴を少年雑誌の場合を視野に入れつつ明確にした上で、近代のジェンダー化されたテキストとしてのロシア表象をめぐるパラダイムについて考察したものである。日本のメディア文化が経験した、異文化表象を成立させる枠組みの構築及びその再生産の構造を、日露関係の視点から明らかにすることをめざした。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reveal the paradigm in which the representation of Russia in Japanese printed media in the early 20th century. The examination involved the comparative analysis of from the viewpoint of Russian and Japanese girls' and childrens' magazines. The main finding was that the cultural images each country had of the other, and which were represented at the intersection of Orientalism and the prevailing gender norms within the Japanese and Russian girls' media.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：ジェンダー メディア ロシア 日本 異文化表象 近代 雑誌

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、2001年度(平成13年度)より、メディアにおける異文化表象の比較文化的研究に取り組んでいた。

この問題をさらに深化させるため、2014年現在までの間、ロシア文化における表象としての日本および日本人や、日本文学における表象としてのロシアおよびロシア人について、戦争や女性表象と関連づける試みが続けてきた。

その過程で、日露双方の異文化へのまなざしを明示化するとともに、それらがいかなる異文化形象化のモデルを生み出し機能させ、また保持し変化させようとしていたのか、そこに潜む力学を理論的に検証する必要性を強く意識するに至った。

考察の結果、オリエンタリズムの正当化・強化と、男性本位の性規範の軍事化が、言説にも視覚的にも典型的にあらわれる戦争において、「日本人」と「ロシア人女性」が担われたジェンダー規範が、軍事的なものへと変換され構造的に組み込まれ大衆に消費されていったことを確認した。

しかしながら、ここでの考察は、成人を読者対象とする活字文化に限定されたものであった。個人において異文化イメージが形成されるにあたり、児童期に受けたメディアからの影響は看過できないのではないかと認識した。また、児童向けのメディアにはより明確な特徴を持つ異文化表象が見出されるのではないかと仮説を立てるに至った。

よって、これまでに得られた研究成果を児童文化に限定し深化させ、日本のメディア文化における戦争・ジェンダー・異文化表象の相互関連性の問題を中心に、発展的に継承させていくこととした。

2. 研究の目的

本研究では、少女雑誌や児童雑誌に媒介された「ロシア」や「日本」をメディア・テキストから抽出し、それらを生み出すメディア生産の構造を浮上させ、オーディエンスとしての読者共同体がいかにメディア・イメージとしての「ロシア」や「日本」の形成に関与していたかについて検討するための土台を築くことを目的とする。

研究の骨子として、特に、次の3点を定める。

20世紀初頭の少女の雑誌メディア文化を取り上げ、そこに見られるロシア表象の特徴を、少年雑誌におけるロシア表象を念頭に置きつつ明確にする。

(1)をふまえたうえで、近代のジェンダー化されたテキストとしてのロシア表象をめぐる諸問題について考察する。

同時期のロシアの児童雑誌も視野におさめつつ、近代日本の異文化表象を成立させるフレーム(枠組み)の構築の様相を

確認するための事例を提示する。

少年雑誌の刊行が日清戦争と同時代的な展開を見せたのに対し、明治期の少女雑誌の登場は、女子教育の進展や日露戦争前夜と機を一にしていることから、戦争とジェンダー、メディア、異文化表象の諸要素がそれぞれ密接な相互関連性を持つことが指摘されよう。

そうしたメディア・テキストからロシア像を浮上させ、こうした「ロシア」を生み出し、受容し、また再生産する時代的・社会的条件といったメディア生産の構造にも目を向け、オーディエンスとしての少女読者共同体が、受容したロシア像からいかにメディア・イメージとしての「ロシア」を立ち上げていったかを問題化することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 一次資料(雑誌)の分析にあたっては、ジェンダー・アプローチによるメディア理論の先行研究をもとに、メディア・テキスト、メディア生産、オーディエンスといった、三つのレベルに分けて考える。

メディア・テキストについては、日本の少女雑誌によるロシア像の編成を中心に、量的分析を行ったうえで、メディア・テキストの領域における国民国家の形成と戦争、ジェンダー、教育、異文化表象の関係性を確認する。確認にあたっては、収集した資料を「御伽噺」や「実録」等のカテゴリー別に分類し、頻出キーワードを抽出するとともに、少年雑誌との比較を行い、少女雑誌の空白部分を明示化する。

(2) (1)で得られた成果をもとに、メディア生産の場に関連して質的な面からディスコース分析を行い、日本の雑誌文化における異文化表象のフレーム構築をイデオロギー分析の見地より考察する。異文化の形象化の一形態であるロシア像が、少女雑誌というメディア・テキストにおいていかなるフレーム(枠組み)を形成しているかに注目する。また、少年雑誌の場合と見比べることによって、少女雑誌というジェンダー化されたメディア・テキストでは、どのような特徴および相違が見られるかについて明らかにする。その際、ロシアの児童雑誌のケースにも目配りする。

(3) オーディエンスの視座から読者投稿欄等に見られる文化表象を抽出し、キーワードやディスコースを分析していくことによって、雑誌メディアの読者共同体においてロシアの文化表象を生み出すフレームが再生産される構造を明らかにする。さらに、それらを比較検討したうえで、今後の理論化への糸口を見出す。

4. 研究成果

(1) [成果]

本研究代表者が過去に集積した、日露戦争期のデータの再検証を行い、特に日露戦争後から第二次世界大戦時までの、ロシア関連用語を含むデータを補充した。大阪国際児童文学館所蔵の資料分については網羅できたと考えられ、当初計画していたデータの充実が達成できた。整理したデータについては、図表化などわかりやすい形式に整え、関係者の了承を得たうえで、資料として今後公表したいと考えている。

で得られた成果から、特に日露戦争期が、日本の少女雑誌におけるロシア表象を考察するうえで、変化が大きく、ジェンダー化も顕著であることがわかった。よって、この時期のデータを精査し、カテゴリー別に分類した、頻出ワードを抽出した。日露戦争期の日本及びロシアにおいて、ロシア及びロシア人表象、女性表象の分析を関連づけることによって、異文化（他者）の形象化にあたり、どのような規範が機能しているかについて考察した。そして、国家間の政治的力学の強い支配下で形成された異文化表象が、ジェンダーの問題と複雑に絡み合いながら編成されていくことを具体的に提示しようとした。この成果の一部は論文「日露戦争期の少女雑誌における領域としての<ロシア>」（『文学部論叢』103号、2012年）として公表されている。

で取り上げた少女雑誌の一つである「少女界」との比較対象として、同時期に刊行された、青少年向けの「少年界」及び「軍事界」におけるロシア表象について、さらなる分析を行った。その際、「軍事界」に掲載された、トルストイの児童文学の戦争物『コーカサスのとりこ』が翻訳・改変されていることが判明した。日露戦争前後に増加する、ロシア文学（児童文学含む）の翻訳の流れを概括したうえで、『コーカサスのとりこ』の位置づけを明らかにした。この問題を取り上げた先行研究は、管見の限り確認されない。この派生的な研究成果については、日本児童文学学会第52回研究大会のラウンドテーブル「児童文学と戦争・平和」において、「フロンティア文学としてのトルストイ『コーカサスのとりこ』」と題する口頭発表の形で公表した。

研究を進める過程で、少女雑誌にお

けるロシア表象を考える際、書き手の「解釈」や「書き換え」という、いわゆる「翻訳」行為が強く作用するとの知見を得た。これをもとに、当時のロシア文学の翻訳がいかになされていたのか、そしてそれが読者にどのように受容されたのか、また翻訳のあり方をめぐっていかなる議論が交わされていたのか、について考察した。わけでもロシア文学の女性翻訳者として瀬沼夏葉を、男性翻訳者として馬場孤蝶、小山内薫を取り上げ、原文と翻訳文との比較や彼らの翻訳論に対する検討をジェンダーの観点からも行った。これに関しては、論文「境界の諸相：瀬沼夏葉の翻訳文学をめぐって」（『国文学攷』第215号、2012）、論文「小山内薫の自由劇場：「模倣」と「創作」の間で」（『近代文学試論』第50号、2012年）及び論文「翻訳者の介入：ロシア文学の翻訳をめぐるとの二つの議論」（『日本研究教育年報』17、2013）として公表した。これらの成果から、当時の「翻訳」力学が、少女雑誌のロシア表象の編成に作用したのではないかと仮説を導き出した。

上記の研究成果のうち、特に に関連する成果を、国際的な場で、ロシア等の研究者に公表したいと考え、

ロシア語論文“ Образ России в японском журнале для девушек в начале XX в. ” (The Images of Russia in the Japanese Girl's Magazine in the Early 20th Century)としてまとめ、Hiroshima Interdisciplinary Studies in the humanities, vol. 11 (Mar. 2013) に掲載された。

(2) [研究上の意義]

本研究は、各分野の先行研究をふまえて、これまで研究対象として周縁におかれてきた日本の少女雑誌やロシアの児童雑誌といった雑誌メディア文化における戦争・ジェンダー・異文化表象の相互関連性に立脚している。本研究の特色は、メディアとジェンダー、メディアと異文化表象、戦争とメディア、戦争とジェンダーというように、従来の研究においてユニット別に扱われる傾向にあったテーマを有機的に関連させた点にある。

(3) [位置づけと今後の課題]

異文化イメージ論やジェンダー研究の分野の研究史に、新たな見解と理論的視

座を提供する可能性が見出せる。
雑誌メディア文化における戦争・ジェンダー・ロシア表象についての関連性の考察を、日本の社会文化のパラダイム全般の議論へと必要な手続きを経た上で敷衍していくことができれば、異文化受容をめぐる地域研究としての展望も開かれることが期待される。

本研究には、日露間の政治的・文化的力学も反映されている。よって、本研究をロシアの日本学、日本のロシア学、さらに異文化理解の議論へと発展させていくためには、文学研究や日露交渉史等の諸研究と連結させた視点から、学際的な研究データが必要とされるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

ミズブチ ソノコ, Образ России в японском журнале для девушек в начале XX в. (MIZOBUCHI Sonoko, The Images of Russia in the Japanese Girl's Magazine in the Early 20th Century), Hiroshima Interdisciplinary Studies in the humanities, vol. 11, 査読無, 2013, pp. 102-108

溝淵園子, 翻訳者の介入 ロシア文学の翻訳をめぐる二つの議論, 日本研究教育年報, 17, 査読無, 2013, pp.107-118

溝淵園子, 小山内薫の自由劇場：「模倣」と「創作」の間で, 近代文学試論, 第 50号, 査読無, 2012, pp. 205 - 214

溝淵園子, 境界の諸相：瀬沼夏葉の翻訳文学をめぐる, 国文学攷, 第 215号, 査読無, 2012, pp. 1-19 頁

溝淵園子, 日露戦争期の少女雑誌における領域としての<ロシア>：「少女界」を例に, 文学部論叢, 103号, 査読有, 2012, pp.153-163

<http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/handle/2298/24631>

[学会発表](計 1件)

溝淵園子, フロンティア 文学としてのトルストイ『コーカサスのとりこ』初期翻訳と日露戦争をめぐる, 日本児童文学学会第 52 回研究大会、ラウンドテーブル：近代児童文学と戦争・平

和, 2013 年 11 月 9 日, 広島経済大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

溝淵 園子 (MIZOBUCHI SONOKO)

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：4 0 3 3 2 8 6 1